



えば、連合軍に対し、特にナポレオンに勝利した露帝アレクサンドル1世<sup>5)</sup>に対し、二人は不器用にしか好意を示せなかった。二人には王家の女性たちが従っていた。彼女たちは公然とコサックの騎兵の軍帽やハンガリヤ兵の羽根飾りのついた軍帽を被り、露營している侵略者たちの前で思わせぶりな媚態を示した。露營は、ロシア兵はシャン・ゼリゼ、プロシヤ兵はシャン・ド・マルス、イギリス兵はブローニュの森になっていた。

「日和見脈」は王座に近づいたが、フォーブール・サン・ジュールマンで王党派の人々が「ブオノパルト」<sup>6)</sup>と蔑称している人物の帰国の可能性を考慮して距離を取っていた。可成り自由主義的で、必要な場合には好人物であったルイ18世は帝国に失望した青年たちを許している。彼は人心を鎮静しようと努力し、また王政復古に不満を抱いている「日曜紳士たち」、小賣店主に気に入られようと願った。

可成り肉づきが良く、肥満とってよい程で、三重顎で足の短い肥った小男で不健康な体質の国王は、若い時から複雑な処方薬に頼らざるを得なかったのである。彼は思う存分に猥談を語っている。愛情をやたらふりまいたが、騒動を起すような恋愛はしなかった。彼の寵愛した女性はケラ伯夫人ゾエ・タロン<sup>7)</sup>で、彼女は弁護士の娘だった。彼女のため国王はサン・トヴァン<sup>8)</sup>に城を築いてやった。

ナポレオンは百名の侍従を持っていた。国王は4名の専属侍従しか持っていなかった。彼は有能な人材を遠ざけ、嗅ぎ煙草入れやカフスを使う人たちに取り囲まれるようにした。宮廷は窮屈で輝きはなかった。

### 百日天下 (1815. 3. 22. — 6. 22.)<sup>9)</sup>

やがて、新政府が絶対王政を樹立しようとしていた時、ナポレオンは、これらの準備を探知し、流されていたエルバ島を脱出し、1815年3月1日、ジュアン湾<sup>10)</sup>に上陸した。「鷺は鐘楼から鐘楼へ飛翔しノートル・ダムの塔に飛来するだろう」と、パリでは噂されていた。画家ダヴィッドは、何度も画筆の政治色を変えてきたので、震えながら叫んだ。「私たちはどうなるんだろう？」タルマ<sup>11)</sup>はコメディエー・フランセーズの棧敷席で喜んでいた。彼の幸福をマルス嬢<sup>12)</sup>も分ち合ったのは、「髪を短く刈ったチビ」ナポレオンに忠実であったため、舞台で口笛を吹かれ弥次られたからである。ネー元帥は、鉄の檻に入れて連行してくると国王に嘘の約束をし、全軍をあげて皇帝に寝返ったのは、彼が皇帝に相変らず忠誠だったからである。

3月19日、誰も防衛していないパリで、人々は「ラ・マルセイエーズ」「サ・イラ」「皇帝陛下に敬礼!」の歌声を聞いていた。ルイ18世にとり、すべてが失われた。彼はパリを去ることしかなかった。その翌日、皇帝の太陽がチュイルリ宮に再び昇り、時計塔からは白旗が消えていた。中庭の閉じられた柵にしがみついて、人々は笑いさざめきかっ歌った。やがて広場に溢れていた人々は、ゆっくりと前進してくる二百名の第一帝政時代の近衛兵たちによって二分された。遂に皇帝が、ベルトラン<sup>13)</sup>、ドルオ<sup>14)</sup>、カンブロンヌ<sup>15)</sup>に取りまかれ、チュイルリ宮のアーチの下に姿を現した。少年兵の中隊が皇帝の周囲に整列する。そして再び、あの不思議な魅力のある声の人々は聞く。「兵士諸君、私は人民と諸君に期待した故に、僅かの兵と共に此処に来たのだ。」しかし、概して人々はほとんど無関心だった。熱意のない静かな歓迎は、ナポレオンの心を打ち凍らせてしまった。革命の理想と計画を再び掲げるべきか？彼の呼び掛けに応じ郊外から駆けつけた二萬五千の現役志願兵が、彼らの軍歌とデモでパリの治安を確保していたし、彼は貴族や僧侶の敵である田舎者たちに依存していたので、彼らに武器を与えて叛乱運動を暴発させる事をためらったのである。恐怖にとりつかれた自由派のブルジョワたちを味方にしようとして、彼は帝国憲法の付帯決議という形で、ルイ18世の憲章にそっくりな憲法を彼らに約束した。多くの人々にとり、これは失望だった。

ナポレオンになすべき事は何が残されていただろうか？交渉か？ヨーロッパから彼を追放した連合国は拒否する。かくて戦争となる。6月11日、彼の軍隊に再びなった部隊の先頭に立ち、皇帝はパリを出発、ブリッセル方面で合流しようとしているプロシヤ軍とイギリス軍を攻撃して殲滅しようとした。

20日、彼は帰還する。しかし彼は背後にワータルローの敗戦<sup>16)</sup>とパニックを引き摺っていた。残存兵たちは首都の北方を防衛し反攻を開始する事をまだ考えていた。志願兵や市民たちは抗戦する決意を固めていた。しかしブルジョワたちは城外や市内で戦いが始まるのではないかと恐れ、議員たちは再びナポレオンが退位することを勧告した。百日天下という国王の空位期間の後、6月22日、彼は諦めて退位する。臨時政府首班フーシェと軍を指揮していたダヴー<sup>17)</sup>は、1815年7月3日の協約に署名し、フランスを外国軍に委ねた。7月6日、プロシヤ軍とイギリス軍がパリに入城、広場、橋、公園、大通り、散歩道、宮殿の中庭などを軍事的に占領した。発射準備をしたままの大砲を握え、横柄に彼らは市内に露営する。

7月8日、ルイ18世はパリに戻った。王が到着した夕べ、チュイルリ宮で人々は踊っ

た。

### 白色テロ<sup>18)</sup>とまたと見出しがたい議会<sup>19)</sup>(1815-1816)

白色テロと呼ばれる期間、パリでは流血の恐怖は無かったが、南フランスでは特に烈しかった。8月19日にはしかしながらラ・ベドワイエール<sup>20)</sup>は、ナポレオンにパリの城門を開いた咎で処刑された。同じ年の12月7日、ネー元帥がリュクサンブール刑務所から引き出され、天文台大通りの十字路で銃殺された〔XX〕の注16参照。

この第二次王政復古は第二回パリ条約<sup>21)</sup>の締結を体験させられる。この条約によりフランスはザールランドの数都市とサヴォワを失い、賠償の重税を課せられたのである。多くのフランス人が苦しめられる。この屈辱に対して人々はブルボン王家を恨んだ。それ以後、不屈の闘争を繰り返す二つの過激派がフランスに誕生した。ナポレオン支持派と知識階級の大多数が参加した自由派の過激派と、ウルトラ即ち過激王党派で、彼らの代議士が上訴なしの裁判をする法廷を構成していた。

この頃パリにロドルフ・トプフェル<sup>22)</sup>というジュネーヴの学生が上京してきた。彼は20歳で、ボヌ街のフランス館<sup>23)</sup>に宿泊した。彼はリュクサンブール宮の絵画を見学しに行き、パレ・ロイヤルの「ニンフ達」に引っかけ、泥と馬車を口を極めて罵っている。彼は恍惚としてイタリヤ座<sup>24)</sup>でチマローザ<sup>25)</sup>の『秘密の結婚』*Il Matrimonio segreto*の音楽を鑑賞している。

2月14日、『ヴィュー・ボワ氏』*M. Vieux-Bois*の未来の画家は、手紙の中で、アルトワ伯(シャルル10世)の次男ベリー公がオペラ座から出た時に暗殺された事を語っている<sup>26)</sup>。「ある人たちは個人的復讐だと言うし、他の人たちはもっと深読みして諸々の党派を攻撃しています... 犯人はその場で逮捕され、無抵抗でした。彼はベリー公が車に乗ろうとした瞬間に刺したのです。奥方はすでに乗り込んでいました。」

6月になり、トプフェルはまだ滞在していて、国王親衛隊兵士に殺害されたラルマン青年の暗殺について書いている。「昨晚、と彼は書く、≪国王萬歳！ 憲章萬歳！≫とブルボン宮の前で人々は叫んで、繰り返したのです！ ボタンホールに大きな白いリボンをつけた約2百人の群衆がこれを心良く思わず、ふといステッキで武装して、彼らは「憲章萬歳」を叫んだ数人を殴り倒しました。これらすべては憲兵たちの眼前で起りましたが、彼らは数回の攻撃しか防止できず、殴打に屈したのです。その後彼らは群衆で溢れかえって

いるルイ 15 世橋の方へ移動しながら、声をかぎりに絶叫しつつ殴打を続けたのでした。「自由派よくたばれ！ 過激派よくたばれ！ サン・キュロット、 ジャコバン派よくたばれ！ 唯一無二なる国王萬歳！」 憲兵隊と武装した一団は群衆を追い散らし —— 数人の青年がカルーゼル広場で逮捕され「憲章萬歳！」と叫んだ —— 親衛隊兵士は発砲しなければいけないと信じ、ほとんど体が触れんばかりに接近して発砲したので一人の学生が倒れ即死したのです。<sup>27)</sup>

パリの青年たちはこの新しい犠牲者をペール・ラシェーズの墓地<sup>28)</sup>まで運んだが、激しい動揺と怒りで数日間にわたり彼らは荒れ狂ったのである。ルイ 18 世がセント・ヘレナ島<sup>29)</sup>でのナポレオンの死を知った後、緊張が少し高まった。夏になり、オペラ座の新ホールが、ル・ペルティエ街<sup>30)</sup>で開場された時、人々はノー・カットで『フィガロの結婚』*le Mariage de Figaro*<sup>31)</sup>の上演を要求した。あらゆる暴君の打倒を目指すヨーロッパのセクト、炭焼党<sup>32)</sup>は、グレーヴ広場のギロチンで処刑されたラ・ロシュルの軍曹<sup>33)</sup>たちの刑罰のような刑罰に帰着して失敗に終わった陰謀を助長していた。しかし国王は弱ってきた。彼は麻痺状態になり易くなった。彼の半睡状態は長引く。体調は熱が出やすくなる。何度かの烈しい窒息状態の後に、緩慢な苦痛、死の喘ぎ、沈黙。9月16日の朝、ポルタル氏<sup>34)</sup>は掛布団をあげ、君主の冷くなった手を取り、枕元につめかけていた人たちに向かって言った。「王様は亡くなられました、国王萬歳！」

百日天下で中断されたこの 10 年の治世の間、パリで目立ったものは何だったろうか？ 王政復古時代人々はどうのような暮しをしていたのだろうか？

かって無い程、紳士方は禁じられた美女に会いに行った。女性の「ふわふわした」*en l'air* 髪型は、頭の天辺で巻毛を 3 つつけるスタイルで大流行する。服は短くなる。女性たちは毛の長い頸巻ボアを首に巻き、ビロードのスーツの縁に長い毛皮パラチナをつけた。袖をふくらましたジゴつき袖は大きく、「私たちの体より大きいわ」とダッシュュ伯夫人<sup>35)</sup>は言った。粋な女性の鼻の先から足の先までと彼女の鼻の先から帽子の花飾りまでは、同じ距離があった。帽子は罎の広いカブリオレや「ア・ラ・フォル」スタイルのボンネットなどで、顔の周囲を暈のように取り囲んでいた。それは「ラ・ノルマ」*La Norma*<sup>補注 1)</sup>を歌ったラ・パスタ<sup>補注 2)</sup>の時であり、移り気な顔をし、繊細な微笑を浮かべ、その背の低さを忘れさせる輝く目をしたシャトーブリアンの、マリ・ドルヴァル<sup>36)</sup>の、ラ・タグリオニ<sup>37)</sup>の、デジャゼ<sup>38)</sup>のロマン主義の時であった。マルス嬢は舞台のダイヤモンドだった。綺麗な彼女は観客の目を魅了し上手に歌った。

ベランジェ<sup>39)</sup>のデビューを鼓舞したシャンソン作者デゾジュール<sup>40)</sup>はヴォードヴィル座<sup>41)</sup>を監督していた。ブラジエ<sup>42)</sup>との共作で、彼は『パリの田舎者』*le Campagnard à Paris*を書く。

「畜生！ なんたる速さ！ なんたる叫び！ なんたる歌！  
御立派な紳士も沢山いるが、みすばらしい奴もわんさというな！  
男の気違い！ 女の気違い！ 男の阿呆！ 女の阿呆もごまんというぜ！  
ブスもわんさか！ 別嬪もわんさか！  
風の強いこと！ 埃の多さ！ 泥だらけさ！」

人気のあるのは現在でも口ずさまれている彼の魅惑的な『午前5時のパリ情景』*Tableau de Paris à cinq heures du matin*である。

しかし誰もが、この気前のいいエピキュリアンの陽気さと元気を持っていた訳ではない。1820年、パリでは三百人の自殺者がでていいる。「うつ病」*spleenétique*がイギリスかぶれの若者の間に流行する。サロンでは、政教協約の解消やルーヴル河岸からサン・クルーに出航する蒸気船が話題になる<sup>43)</sup>。ポン・ヌフの上では、1792年に破壊されたアンリ4世の騎馬像が再建される<sup>44)</sup>。連合軍が去った後、ジェリコーはサロンに「メデューサ号の筏」<sup>45)</sup>*le Radeau de la Méduse*を出品するが、人々はその画面に大洋の真っ只中で幸運の数枚の板にしがみつき揺り動かされているフランスの姿を見たのである。バルザックは、オラーヌ・ド・サン・トーヴァンの仮名で初期の作品を出版する<sup>46)</sup>。スタンダールは『恋愛論』*De l'amour*<sup>47)</sup>を、ラマルチーヌは『冥想詩集』*les Méditations*<sup>48)</sup>を出版する。

バンジャマン・コンスタンは、『アドルフ』*Adolphe*<sup>49)</sup>の中で、あけすけにジェルメーヌ・ド・スタールと自分の恋を物語っている。キューヴィエは地球の変差を研究する。シャンポリオン<sup>50)</sup>は象形文字の意味を解読する。

(続く)

## パ リ

## — 誕生から現代まで —

## (訳 注 XXI)

1) Charte constitutionnelle : 1814年6月4日、ルイ18世により発布された。法の前の平等、出版、信仰及び個人の自由、財産の不可侵権（但し大革命中に獲得した国有財産は除外）、裁判官の終身的身分保障、二院制の議会制度などを含み、ナポレオン体制よりも明白に自由主義的であった。しかし第14条は国王に「国家の安全に必要なあらゆる法令を発する権限」を認めている。この条文によりシャルル10世がかの有名な法令を発布し、1830年の7月革命を惹起してしまう。1830年8月7日、ルイ・フィリップは旧憲章が正統な王権を神授権としていたのを改正し契約による権利とし、立法権を国王と同じく議会にも与え、人民主権に新憲章は基礎を置くとした。しかしこの憲章も1848年の2月革命で廃止される。

2) l'Ogre de Corse : ナポレオンにつけられた蔑称の一つである。

3) Charles X (1757-1836) : Charles-Philippe は1757年10月9日、ヴェルサイユで生まれた。父はルイ15世、母はマリ・ジョゼフ・ド・サクスで8人兄弟の6番目に生れた。長男と次男は夭折し、3男のルイ・オーギュストがルイ16世として即位し、1793年8月23日に処刑され、4男のルイ・スタニスラム・グザヴィエがルイ18世として即位するが、1824年9月16日に死去し、5男の彼に王位がまわってきたのである。兄の死と共に即位するが、それまではアルトワ伯爵と称していた。バスチーユ占領の時から既に国外亡命を決意、王家再興のための支持者を求めヨーロッパ各地を転々とし、この間に亡命貴族の悲哀と辛酸を嘗めた。ナポレオンの没落と共に帰国し、1814年2月23日にフランス代表として連合軍と軍事協定に署名した。彼の邸マルサン館は過激王党派いわゆるウルトラの巢窟になった。兄の死により、シャルル10世として即位し、ランスの大聖堂で聖別式を挙行したが（1825.5.29）、その時代錯誤振りに多くの国民が失望してしまう。亡兄の自由主義的憲章を尊重するポーズはすぐにながかり捨て、反動的性格を露呈する。彼の目標は昔日の絶対王政の再建であった。彼が中道派のマルチニャック内閣（1828.1.-1829.8.）を罷免し、シャルル10世お気に入りのポリニャック（1780-1847）に組閣を命じた。彼はマリ・アントワネットの親友ヨランド・マルチエヌ・ガブリエル・ド・ポラストロン（1749-1793）の息子で、父のポリニャック公（1745-1821）は横暴と浪費で当時

のフランス国民の憎悪的になり、ウクライナに亡命中に客死した人物である。人民の敵の息子というレッテルはこの新総理に貼られていた。彼はまた熱心なカトリック信者でこのため教会の勢力が更に宮廷に増大し、いよいよ反動的性格が国王の周囲で強くなったのである。1830年にこれまでの不況が深刻化、また農作物が天候異変のため大凶作となり、厳冬の寒気のため孤独な老人たちが室内で凍死体で発見されるという悲惨な事件が頻発した。かかる悲劇的情勢をなんら改善できないポリニャック内閣は、3月18日に不信任案が可決される。かくて国王は5月16日に議会を解散するが、6月から7月にかけて実施された選挙は反政府派が274議席を獲得して勝利してしまう。かくしてシャルル10世は憲章第14条の緊急大権條項により、7月王令を發布、出版の自由の禁止、議会解散、選挙権資格の厳格化など、ほとんどクー・デタとってよい反動政策を打ち出した。この暴挙に対し、パリ市民たちは決起する。「光栄の3日間」と呼ばれる武装蜂起により、シャルル10世は退位に追い込まれる。孫のボルドー公への譲位は実現しなかった。こうして彼は3度目の亡命の道を進む。イギリス、オーストリーと移り住み、最後はイタリアのギリジャで歿した。1836年11月6日の事である。彼の治世中、トルコの弾圧に介入しギリシャ独立を実現した事、アルジェリアに出兵しアルジェを占領、後のフランスの植民地政策の第一歩を踏み出した事などが功績といえよう。1773年にマリ・テレーズ・ド・サヴォワと結婚、アングレーム公とベリー公をうるが、彼らが父の跡を継いで国王になることは遂になかったのである。

4) Marie-Thérèse-Charlotte, duchesse d'Angoulême, dite Madame royal (1778-1851) : 父はルイ16世、母はマリ・アントワネットで3人姉弟の長女。1792年に両親と弟ルイ・シャルル(ルイ17世)と4人で大革命時代にタンブル塔に監禁されたが、唯一人生き残った。それは革命政府がオーストリーの捕虜となっている政府委員たちとの交換要員として彼女を指名したからである。亡命中に叔父プロヴァンス伯(後のルイ18世)と合流し、1799年6月10日、同じ叔父でプロヴァンス伯の弟アルトワ伯(後のシャルル10世)の長男アングレーム公爵ルイ・アントワヌ・ド・ブルボン(1775-1844)と結婚した。2人は従兄妹の間柄である。夫と共に1814年に帰国し、百日天下の時はボルドーに逃れて王家防衛のために奔走し、ナポレオンをして「ブルボン家唯一の人物」と言わしめた。教会勢力の伸張に努力したため、彼女は不人気で、1830年7月革命の時、再び亡命し、後は甥シャンボール公の教育に余生を過し、オーストリーのフロスドルフ城で歿した(1851.10.19.)。



5) Alexandre I (1777-1825) : 在位 1801 年から 25 年まで。パーヴェル 1 世の長子。祖母エカテリーナ 2 世はスイス人大佐ラ・アルプに彼を托し、18 世紀啓蒙思想により開明的専制君主に養育してくれるよう命じた。烈しい感受性の持主で権力に執着しながらも自由主義的イデオロギーに傾倒し、そのため独裁専制君主の父パーヴェル 1 世 (1754-1801) の暗殺に発展した宮廷クー・デタに参加してしまった。即位するや、検閲、秘密警察、拷問の廃止や農奴制の廃止などを企てたが、未遂に終わった。これらは特権階級の貴族たちの反対のためだったが、皇帝自身の性格的欠陥による所も大きかった。その複雑で移り気で優柔不断な人格は同時代の人々にとっても説明しがたい謎であった。対外的にはイギリス、オーストリー、プロシャと同盟しナポレオンに対抗したが (1805, 1806-07)、結局破れてティルジット条約を締結 (1807)、ナポレオンの命じるまま大陸封鎖に協力したが、対英貿易の利益を失った地主貴族たちの烈しい反対に会い、協力を放棄したため、ナポレオンのロシア遠征となった。母国の気候と愛国的抗戦により幸運にも勝利者となり、ウィーン会議に君臨、ポーランドの大半を自国領とする事に成功した。ヨーロッパ反動勢力の指導者として、あらゆる自由主義的民主主義の運動を弾圧し、ウィーン反動体制を擁護した。しかし一方で若い頃の夢想や希望に再び身を焦し、現実とのギャップに深刻な憂愁にとりつかれていた、といわれる。クリミア旅行中に急死するが、毒殺だという噂がたった。さらにもう一つの伝説は、この急死は見せかけで、実は隠者に身をやつして一生を過した、と伝えている。その証拠に、1926 年に彼の墓があばかれた時、その中は空で一つの骨もなかったという。

6) Buonaparte はナポレオンのコルシカ綴りの本名。しかしこの発音はフランス人の軽蔑的になったので、フランス語風に Bonaparte に改称したといわれる。

7) Zoé Talon, comtesse de Cayla (1784-1850) : 弁護士の父タロンは帝政時代にプロヴァンス伯の密偵として逮捕投獄されたが、彼女の献身的努力により釈放された。ケラ伯と結婚した彼女は王政復古期の宮中に参上し、ルイ 18 世の寵愛を受けた。彼女の美貌と優雅さは国王を完全に恋の虜にし、彼女は多くの贈物を拝領したが、なかでも注目すべきはサン・トゥアン城館である。彼女は国王の寵愛を悪用し、いろいろな不正取り引きをしたと攻撃されている。長い訴訟の末にやっと離婚が成立した彼女は、ルイ 18 世の死後はサン・トゥアンに引き籠り、農業改良に没頭、毛足の長い羊の新品種を創造している。ある人たちは、美しき伯爵夫人はルイ 18 世のプラトニックな恋人にすぎないと主張し、またこのルイ 15 世の孫の最上の甘えた行動は、この魅力的な伯爵夫人の裸の胸の上で煙草

をくゆらす事だとも言っている。

8) Saint-Ouen：パリ北方郊外のセヌー・サン・ドニ郡の郡庁所在地，人口約 49,000 人。14 世紀以来，離宮があり，ルイ 18 世がパリ入城前の 1814 年 5 月 2 日，後の憲章となる宣言を署名している。彼はこの離宮を取り壊し，愛人ジュエ・タロンのために新館を建築させた。この地は 19 世紀を通じて発展し工場地帯に変貌した。

9) Cent-Jours：ナポレオン 1 世の最後の統治期間を指す。エルバ島を脱出して，1815 年 3 月 20 日，皇帝がチュイルリ宮に到着した日から，同年 6 月 28 日，第 2 次王政復古によって終るまでをいう。帝国再興を目指し，1815 年 3 月 1 日，僅かの手兵と共にジュアン湾に上陸した彼は，討伐隊を帰順させ，一路北上，到る所で民衆の熱烈な歓迎を受けつつパリに入城する。彼はバンジャマン・コンスタンに命じ帝国憲法改正の附加法を作成させ，法の前の平等，信仰，思想，出版の自由を定め，自由主義的革新色を前面に押し出し，ブルジョワ層の支持を取りつけた。しかし皇帝がその座を確保するには連合軍に対する勝利のみがその手段であった。運命的なワーテルローの会戦は，幾つかの不運が重なり，ナポレオンの敗北で終わった（1815.6.18.）。皇帝は 2 度目の退位をし，帝国再興の夢は実現できなかった。

10) Golfe-Juan：フランス南部アルプ・マルティーム県ヴァロリ郡にある海水浴場でジュアン・レ・パンの近傍。エルバ島を脱出したナポレオン一行が，1815 年 3 月 1 日に上陸した事で，歴史上の名所となった。ここから彼はラフレ，グルノーブル，リヨン，オクセルと北上しパリに入城，後世この道がナポレオン街道と呼ばれるようになる。

11) François-Joseph Talma（1763-1826）：ナポレオン 1 世に愛顧を受けたフランスの悲劇俳優。ロンドンで学び，1787 年，コメディ・フランセーズでヴォルテール作『マホメット』でデビューし，その才能を認められて間もなく正座員になるが，1791 年に同志と語らって脱退，バレ・ロワイヤル座によって，『オセロ』，『ハムレット』，『マクベス』などシェイクスピア劇を演じた。1799 年に和解が成立，コメディ・フランセーズに復帰し，以後 25 年間，フランス第一の名優として活躍した。史実の尊重，自然な演技，台詞の正確さを心がけ，写実主義を舞台に導入する努力を続けた。

12) Mlle Mars（1779-1847）：フランスの名女優，本名 Anne Françoise Hippolyte Boutet。父 Monvel も母も俳優で，母は娘と同じマルス嬢として出演していた。彼女は 13 歳でデビューし子役とし舞台を務めていたが，1799 年にフランス座の正座員になった。それ以後，彼女は生娘役と若い女性の主役を長い間務め，1812 年にはコンタ嬢（1760-

1813) に代って男の気をそせる魅力的な女性を演じるようになった。彼女はデュマ・ペール、ドラヴィーニュ、ユゴーなどの戯曲に出演したが、特にユゴー作『エルナニ』初演の時、主役エルナニの恋人ドニャ・ソルを演じて絶賛を博した(1830)。『エルナニ』の大成功がフランスにおけるロマン主義の勝利を宣言する文学史上の特記すべき歴史的事件となる。名声に包まれた彼女は、1841年に引退した。

13) Henri Gratien, comte Bertrand (1773-1844) : フランスの将軍。ナポレオンの忠実な部下で、エジプト遠征以来、常に彼と共に戦った。オーステルリッツ、フリートラント、ワグラムで軍功をたて、中將に昇進し伯爵に叙され、デュロックの死後、彼の後任として侍従長になる。ライプニッツの敗戦の時は、残存兵力を救助した。エルバ島にもセント・ヘレナ島にも同行し(1815-1821)、『エジプト、シリア戦記』*Campagnes d'Egypte et de Syrie* のナポレオンの口述を書き留めた。この著書は彼の死後出版される(1847)。彼の賞賛すべき皇帝への献身に感動したルイ18世は、欠席裁判による死刑判決を取り消し、ベルトランを元の階級に復活させた。ナポレオンの歿後に帰国した彼は1830年の革命後エコール・ポリテクニクの校長に任命され次で故郷のシャトールーから代議士に選出され(1831-34)、議会で自由主義の理想を擁護した。1840年、ジョワンヴィル親王と共に、ナポレオンの遺骨を持ち帰るため、セント・ヘレナ島を再訪し、熱狂的歓迎のうちに遺骨と共に帰還した。彼はアンヴァリッドでかつての上官だったナポレオンの傍らで眠っている。

14) Louis Antoine, comte Drouot (1774-1847) : フランスの将軍。パン屋の息子だったが、メッツの砲兵学校を卒業後に共和政府の部隊に入隊、1808年には帝国陸軍野砲連隊の副司官大佐になった。ワグラムの戦い(1809)、モスクワ会戦(1812)で軍功をたて、1813年に将軍となり、エルバ島までナポレオンに同行し、彼から島の総督に任命された。「大軍団の賢者」の綽名のある彼は、ワーテルローでも抜群の働きをした。軍事法廷で裁かれたが、王政復古時代に釈放され(1816)、その後は引退生活に入った。

15) Pierre Jacques Etienne, baron de Cambronne (1770-1842) : 1792年、志願兵として大革命とそれに続く帝政時代の戦争に従軍し、アノアの戦い(1813.10.30.-31.)で少將に昇進した。近衛部隊副官としてナポレオンに同行しエルバ島へ行き(1814)、彼と共にフランスに帰還(1815)、ワーテルロー会戦では近衛部隊の老兵を指揮し、敗軍の中で最後の方陣をつくり頑強に抗戦した。包囲したイギリス軍の投降勧告に「近衛兵は死すとも降伏せず！」*La garde meurt et ne se rend pas!*と答えたのは有名な挿話である。重傷を負いイギリス軍の捕虜となり、イギリス本土に連行された。1816年、フランス軍事

法廷に引き出されるが、有名な弁護士ベリエール（1790-1868）の熱弁により、満場一致で釈放された。ブルボン王家に仕えて軍務に復帰し、ルール要塞司令官を務めた（1820-24）。後にナントに引退し、平穏な最後を迎えた。

16) Waterloo の敗戦：ワーテルローはベルギーのブラバン地方にあるソワニユの森の南端の町で人口は約 14,000 人。首都ブリッセルの南方 18 軒に位置する。戦場となった平原はこの町の北方 5 軒の所にある。1815 年 6 月 18 日、ナポレオンが、イギリス、ロシア、オーストリー、プロシヤの四国が主力の連合軍に完敗し、帝国再興の野心が消滅した運命の地である。ナポレオンはオーストリー軍とロシア軍がイギリス軍とプロシヤ軍に合流する前に各個撃破すべく、先ずウエリントン指揮のイギリス軍とブリュッハー指揮のプロシヤ軍を叩くべく、6 月 15 日、128,000 の兵を率いてサンプル川を渡河する。6 月 16 日、リニーでプロシヤ軍を撃破するが、全滅させることができず、彼らは整然と退却していった。ナポレオンはグルーシ将軍に追撃を命じた。イギリス軍攻撃を命じられたネー将軍はワーテルローの要衝モン・サン・ジャン丘陵に堅固な防衛陣地を構築していたイギリス軍主力に直面する事になる。フランス軍の連絡が停滞し、ナポレオンの下にプロシヤ軍の退却やウエリントンの陣地構築の知らせはなかなか届かず、6 月 17 日の貴重な時間を空費してしまう。グルーシに追撃のため 33,000 の兵を与え、彼が 70,000 の主力を率いて戦場に到着したのが 17 日午後 6 時だった。この頃は既に陣地構築を完了し、ここでナポレオンの主力を食い止めるから、なるべく早く到着してほしい旨の伝言をウエリントンはブリュッハーに伝えていたのである。天候もナポレオンに味方しなかった。17 日午後から一晩中豪雨が降り続き、大地は泥濘み、大砲の移動が困難になり、彼の得意とする集中砲火による先制攻撃が、不可能になった事と、中央突破のための騎兵隊の攻撃が、同じく馬が泥に足をとられて機動力が発揮できなかった事である。堅固な陣地、しかも丘の上の有利な地点に構築された陣地で防衛をするイギリス軍に、フランス軍は全力をあげて猛攻を繰り返したが、遂にこの堅塁を抜く事ができず多大の損害を被ってしまった。11 時半に開始された戦闘は、フランス部隊の精兵の最後の攻撃がプロシヤ軍騎兵隊の側面からの奇襲によって潰滅した時に終わった。待ち望んでいた援軍が味方でなく敵のプロシヤ軍だと判明した時、フランス軍の士気は一気に阻喪した。かくて大軍団の敗走が始まった。時に午後 7 時といわれる。しかし第 1 連隊の 2 大隊が方陣を形成し敵の追撃を阻止したため、フランス軍は全滅を免れたのである。フランス軍の損害 40,000 以上、イギリス軍 15,000、プロシヤ軍 7,000 と伝えられている。

17) Louis Nicolas Davout, duc d'Auerstaedt, prince d'Eckmühl (1770-1823) : ブリエンヌ幼年学校でナポレオンと同級生だった。エジプト遠征に従軍、アブキールの勝利で元帥に列せられた (1804)。ナポレオンの大軍団の第3軍団を指揮し、アウステルリッツ (1805)、アウエルシュタット (1806)、エックミュール (1809) の会戦に勝利し、duc と prince の称号を得た。ポーランド総督の後、ロシア遠征に参加 (1812)、第1軍団を指揮してバグラティオン (1765-1812) 指揮のロシア軍を粉砕した。撤退に当ってハンブルグを死守、1814年5月31日にやっと降伏した。百日天下の間陸相を務め、ワーテルローの敗戦後、議会から最高司令官を命ぜられ降伏文書に署名せざるを得なかった (1815.7.3.)。常にナポレオンに忠誠を尽した彼はルイ18世の宮廷には1818年になってからやっと出仕した。貴族院議員に列せられた (1819)。彼はナポレオン麾下の最も優れた將軍といわれる。

18) Terreur blanche : 歴史上「白色テロ」と呼ばれる事件は2回あった。最初は1795年4月と5月にあったジャコバン派の蜂起が失敗に終わった後、反動的に発生した王党派と宗教的狂信者による復讐で、牢獄に留置されていた政治犯たち、ジャコバン派、共和主義者、宣誓司祭、新教徒たちが血祭に上げられた。このテロはリヨン、マルセーユ、トゥーロン、タラスコンなどに飛火し、そこでは官憲の黙認のうちに実行された。

第2回の白色テロが今回のもので、ワーテルローの敗戦によるナポレオンの没落後の1815年夏の間に行われた。犠牲者はナポレオン支持者即ちボナパルティストと昔の革命派の人々である。特に南仏地方では、宗教的狂信が政治的情熱に融合し、狂信的カトリック教徒が、大革命とナポレオン帝国に大多数が友好的だった新教徒に対し、残虐な蛮行を加えた。ウルトラの指導者であるアルトワ伯 (後のシャルル10世) の家の色である緑色のバッジをつけた「緑党」verdets と呼ばれた王党派が反ナポレオン感情が強かったこの地方の人々の支持を得て、武装してテロを断行した。ナポレオンが実施した徴兵制が、大切な働き手を奪ったため、皇帝への憎悪と不満が増大していたのである。ワーテルロー敗戦のニュースが広まると、マルセーユでは人々が決起し皇帝の近衛兵だったマムルーク兵たちを虐殺した (6.25.)。トゥールーズではラメル将軍がルイ18世の名で「緑党」を武装解除しようとして暗殺され (8.15.)、2週間ほど前の8月2日、アヴィニオンでブリュヌ元帥 (1763-1815) が暗殺され、死体はローヌ川に投げ込まれた。ラメル将軍虐殺を知った国王は甥のアングレーム公爵を鎮静化のために派遣した。そのため不法な残虐行為は秋頃から終熄に向った。しかしその後は政府が法の名の下にナポレオン支持者の肅正に乗り

出し、形ばかりの略式裁判を行い、ラ・ベドワイエール将軍（1786-1815）、双児のセザールとコンスタンタンのフォーシェ将軍（1760-1815）、ムートン・デュヴェルネ将軍（1769-1816）らが、それぞれバリ、ボルドー、リヨンで処刑された。この報復的肅正のクライマックスが英雄ネー元帥の処刑である（1815.12.7.）。迫害はナポレオン支持者にとどまらず、ルイ 16 世の死刑に賛成票を投じた国民公會議員たちも弑逆者として国外追放に処せられた。

19) Chambre introuvable：1815 年 8 月 22 日に実施された選挙で、402 名の議員のうち実に当選した 9 割が王党派の人々である。かかることは前代未聞のことで、このような議会は見ることがないし、またこれからも見られないだろう、という意味で「またと見いだしがたい議会」と呼ばれたのである。彼らの大部分は古き良き旧制度の社会の復活を熱望しており、憲章の自由主義的性格に反対していた。タレイラン・フォーシェ内閣の次に成立したりッシュリュ内閣は議会の行き過ぎを抑制しようとし、国王も内閣を支持、国王と議会が対立する事態に発展する。結局この反動議会は、1816 年 10 月 5 日、ルイ 18 世により解散させられる。議員の中には王権神授説を信奉し、絶対王政の再来と貴族の特権の復旧を願っていた議員すらいたのである。

20) Charles Angélique François Huchet La Bédoyère（1786-1815）：フランスの将軍。ランヌやミュラーの副官を務め、1815 年ナポレオンがエルバ島から帰還した時、グルノーブル駐在第 1 連隊の大佐だった。彼はグルノーブル近郊のヴィジルまで出かけてナポレオンを迎え、復歸した皇帝に最初に協力した大佐となった。ナポレオンは彼の忠誠を愛でて自分の副官としすぐ後に少将に任命、フランス貴族に列せしめた。王政復古となり、ラ・ベドワイエールは叛逆者第 1 号として逮捕され、略式裁判により死刑の判決が下され、パリ郊外のグルネルの野原で銃殺された（1815.8.19.）。これは典型的な報復の処刑である。彼の処刑が皮切りとなり、復讐の肅正が開始される。

21) パリ条約（1815.11.20.）：ワーテルローの敗戦で、ルイ 18 世と対仏同盟諸国との間に、1814 年 5 月 30 日に締結した第一次パリ条約に続いて締結されたもの。主な内容は、フランスは 1789 年の国境を維持し、オランダにマリエンブルク フィリップヴィルの両要塞を割譲、プロシャにザールルイ、ザールブリュッケンを割譲、フランスの東部と北部国境の 17 の要塞群はフランス側の負担で 15 萬の連合軍が占領、7 億フランの償金支払いが課せられ、第 1 次よりフランスにとり苛酷な内容となった。

22) Rodolphe Töpffer（1799-1846）：スイスの画家でまた作家でもあった。彼の父ア

ダムも画家で、ウージェニー皇后のデッサンの教師をしていた。弱視のため画をあきらめ、1824年にジュネーヴに寄宿制の教育塾を創設するが、この教育機関は間もなく全ヨーロッパの名声を得た。1832年にジュネーヴの美文学アカデミーに迎えられ、修辞学教授に就任し、死ぬまでその職にあった。彼は学生を連れアルプス山脈縦断徒歩旅行をし、自ら挿絵を描いた旅行記『ジグザク旅行』*Voyages en zigzag* (1834)を發表している。辛辣な戯画作家としても有名で、『ヴィユー・ボワ氏』*Monsieur Vieux-Bois*や『クレパン氏』*Monsieur Crépin*などの作品を残している。また幻想に溢れるコント作家でもあり、ロマン派の過激な誇張を嫌い、故郷と家庭を愛し、つつましく誠実な生活の生み出す幸福を描いた。代表作に『司祭館』*Le Presbytère* (1883)、『ローザとゲルトロッド』*Rosa et Gertrude* (1846)などがある。

23) Hôtel de France：ボヌ街 ([xv1] の注 20 参照) の 5 番地にあった家具付きホテルで、後にロレーヌ館 Hôtel de Lorraine と改称された。このホテルには大革命から帝政、王政復古までの激動の時代をしたたかに生き抜いた政治家ボワシー・ダングラ伯 (1756-1826) が 1793 年に住み、シャトーブリアンは 1804 年に、映画のパイオニアのレイ・デリュックが、1924 年に 34 歳でこのホテルで歿している。

24) La Salle des Italiens：第 2 区のボウルディュー広場にあった。この辺一帯の土地はショワズール公が所有して大邸宅を建築していたが、政界引退と借財により徴税請負人ラボルドの手に移った。彼は公の後援で巨万の富を手に入れていたので、零落したショワズールを援助した。それはこの土地に道路が開通し地価が高騰したため、土地を分譲してまたしても巨利を得たからである。これらの道路に囲まれて出来た新しい広場ボウルディュー広場にファヴァール・ホールという劇場を建設したのである (1781-83)。この劇場にそれまでブルゴーニュ館にいたイタリア人の劇団コメディエー・イタリアエヌが移転してきた。劇団は公爵の歿後に地所を買収して地主となる。譲渡の礼として劇団は公爵家に舞台右手の前の栈敷席の一つ永久に無料で貸与するという約束をしている。劇場の柿落としては 1783 年 4 月 28 日だった。第 1 帝政時代はこの劇団が入っていたが、1820 年から 21 年はオペラ座の劇団が入り、1838 年 1 月 13 日から 14 日の火事で全焼し、再建後はオペラコミック劇団が入り、オペラ・コミック座となった。

25) Domenico Cimarosa (1749-1801)：イタリアの歌劇作曲家。貧しい家に生れ、苦勞してナポリの音楽学校に学び (1761-72)、在学中から歌劇などの作曲に励んだ。間もなくそれらの作品でヨーロッパ中にその名が喧伝され、ロシアのエカテリーナ王女に招かれ、

ベテルブルグの宮廷作曲家兼楽長に就任した（1787）。ロシアからの帰途ウィーンでサリエーリ（1750-1825）の後任としてレオポルド2世の宮廷楽長を務め、その間に彼の最高傑作『秘密の結婚』*Il Matrimonio segreto*を作曲した（1791）。ナポリに帰国後、共和主義を賛美する曲を発表したため追究され、ウィーンに避難した。その後ローマ、ヴェネツィアに移り、同地で歿した。70篇余りの歌劇の他に、オラトリオ、ミサ曲、クラヴサン用のソナチネなども作曲している。スタンダールは『秘密の結婚』を激賞している。

26) ベリー公の暗殺：1820年2月13日午後11時頃、オペラ座から出て馬車に乗り込もうとしたベリー公爵が、暴漢により凶器で右胸を刺された。近くに医者がいなかったため、やっと見つけた医院に運び込むのに手間取り、しかもその部屋が狭く、廷臣たちでごったがえし、通風も悪かった。吸い玉と刺絡をしてなんとか命だけはとりとめようと努力がなされた。名医の誉たかいギョーム・デュピュイトランが到着したのが、14日の午前1時頃。傷口を診察した彼は絶望との診断を下す。総理のドカーズもデュピュイトランのすぐ後に駆けつけたが、その遅さに不平の吐きが洩れた。5時に国王が到着し、彼は自分の甥の臉を閉じてやったのである。

犯人はなんら抵抗せずに逮捕された。鞍作り職人のルーヴェル（1783-1820）という男で、熱烈なボナパルティストである彼は、ベリー公を暗殺する事によりブルボン王家の血筋を断絶させようと決意した、と犯行の動機を供述している。彼は最後まで自分の単独犯行で共犯者はいないと主張し、死刑の判決を受け、しっかりと足取りで処刑台上に登った。

ベリー公爵は王弟アルトワ伯の次男で、ルイ18世に子がいないため、将来の国王たるべき相続者とみられていた。彼は最初の夫人を喪い、再婚したマリ・カロリーヌ・フェルナンド・ルイズとの間に娘3人を授かったが、2人が夭折し、この時1人の娘のみが生存していた。しかし公妃は妊娠中で、夫の死後に男子を産む（1820.9.29.）。この子がシャンボール公で後にアンリ5世と称する。公爵の暗殺は王党派を憤激させ、反動化が始まり、ドカーズ内閣は退陣、検閲制度が復活、ウルトラのみのヴィレール内閣が成立、自由派やボナパルト派は追放され、大学でも有名教授の辞職や罷免が相次ぎ、1822年10月にはソルボンヌでのギゾーの講義も中止されるのである。

27) ラルマンの死は、反動的政策に憤激していた自由派やボナパルティストの青年たちを刺激し、6月5日に行われた彼の葬列には5,000人も青年が参加しデモ行進した。

28) cimetière du Père-Lachaise：パリ市東北部旧シャロンヌ村の高台にある。昔はパ



り大司教の所有地だったので、champs-l'Evêque と呼ばれていたが、1626年にイエズス会が買収し、周囲に塀をめぐらして中央部に邸を建てた。この丘の頂上からルイ14世が、フロンドの乱の時、フォーブール・サン・タントワヌで展開したチュレンヌとコンデ軍の戦いを観戦したことから「ルイの丘」Mont-Louis と呼ばれるようになる(1652年から)。20年後、国王の告解師を務めていたフランソワ・デクス・ド・ラシェーズ(1624-1709)こと通称ラ・シェーズ神父(ペール・ラ・シェーズ)の引退所として、ルイ14世がこの地を彼に与え、館も増築して下賜した。1763年8月31日の布告で、イエズス会追放策の一環として、この土地は売却される。1790年、立憲議会在衛生と伝染病予防のため、パリ市内の墓地を郊外に移転させる事を決議したが、この決議を実行したのがナポレオンである。彼は1804年5月21日、国が買収したペール・ラシェーズの土地を墓地に改造する事を決定、工事の設計者はプロニャンクールである。この墓地には、モリエール、ラ・フォンテーヌ、ミュッセ、ドーデ、オスカー・ワイルド、プルースト、ショパン、ビゼー、コロ、ドラクロワ、サラ・ベルナルなど多くの有名人が眠っている。また1871年5月28日、パリ・コミューン叛徒の最後の抵抗がこの墓地で行われ、捕虜になった147名余が東南の隅の塀の前で処刑され、Mur des Fédérés として今日でも参拝の人が絶えない。名曲「さくらんぼの実る頃」は彼らを偲んで歌われた。

29) ile Sainte-Hélène, 英語で Saint Helena Island : 南大西洋の火山島で熱帯地方に属し、面積は122km<sup>2</sup>。アフリカ西海岸から1,851 軒にある絶海の孤島。1502年5月21日にスペインの航海者ノヴァ・カステラにより発見され、その日が聖女ヘレナの祝日に当たっていたため、その名が命名された。1645年から51年までオランダ人が支配していたが、イギリス東印度会社が、1659年に支店を出し、1673年から独占権を手中にした。印度航路の中断港として重要だったが、蒸汽船の発達と特にスエズ運河の開通によって交通の要衝でなくなった。しかし第2次世界大戦の時は戦略的拠点として再び重要となった。

1815年10月15日の朝、英艦ノーザンバーランド号で到着したナポレオンは、ベルトラン、モントロン、ラス・カーズ、グルゴアら少数の部下の将軍を伴ってきた。不順な天候と英軍司令官バドソン・ローの無理解な処置、将軍たちの不和などの原因が重なり、1821年5月5日、52歳でナポレオンは死去する。原因は胃癌といわれているが、砒素による毒殺という説も根強くある。

30) rue Le Peltier : 第9区にあり、イタリアン大通りとシャトーダン街を結ぶ、長さ458米、幅11.69メートルから15米の道路。この道は、1786年に金融業者ドラボルドが

自費で自分の土地に建設し、当時のパリ市長ル・ペルティエ・ド・モルフォンテーヌの名をつけた。この道はパリで歩道付きの3番目の道である。1793年には地主のブルーランジェという女性が自分の土地を通してこの道を延長させ、1862年には更に延長工事が行われ、現在の姿になった。

この通りの12番地に建築家ドブレにより僅か12か月(1820-21)で、ル・ペルティエ・ホール Salle le Peletier という大劇場が建設される。この新劇場は、ベリー公爵の暗殺後にその不吉な記憶を抹消するためのオペラ座劇団が公演していたルーヴォワ・ホールが取り壊され、自分の劇場を失ってしまったオペラ座劇団のために、急遽新築されたのである。座席数1790席、ル・ペルティエ街6番地に面していた正面入口は8体の立像で飾られていたが、音楽の女神像がなかったので、パリ市民の嘲笑を浴びた。1821年8月16日の柿落としの舞台はジュイとカテル共作の『インドの舞姫』*Les Bayadères* とバレエ『ゼフィロスの帰還』*Le Retour de Zéphire* だった。この劇場は帝政時代までに年80萬から10萬フランの補助を受けていた。開幕は午後7時、上演日は、月、水、金曜の週3日だった。1873年10月28日夜に原因不明の出火により翌29日まで24時間燃え続け完全に消滅してしまった。

31) *Le Mariage de Figaro* : ボーマルシェ作の喜劇で、前作『セビーリャの理髪師』*Le Barbier de Séville* (1775年2月23日初演)の続篇として執筆された5幕散文喜劇。ここでは前作以上にアルマヴィヴァ伯爵が主人公フィガロに愚弄され、貴族階級の代表としての醜態を露呈し、庶民代表のフィガロに徹底的に痛めつけられている。一般民衆はこの風刺と機知に溢れた喜劇を観劇し、支配階級に対する日頃の不満を解消し大いに溜飲を下げたのである。それだけにフィガロが伯爵を痛烈にやっつける台詞はこの劇の見所だったから、ノー・カットの上演を熱望したのである。この作品は1778年に脱稿し、1781年にコメディ・フランセーズに提出されていたが、国王と検閲官の妨害により、1784年4月27日にやっと上演された。ルイ16世は、「なんと忌むしい、決して上演させるな」と言ったそうだが、上演阻止は実現せず、初日の座席は満員で、貴族も庶民もこの傑作に抱腹絶倒したという。

32) carbonarisme : 19世紀初頭、ナポレオンの失脚後にフランス軍を駆逐し、シチリアに亡命中のフェルディナンド4世の復位を計画した政治的秘結社で、ナポリ王国内で発生した。やがてイタリアの実質的支配者であるオーストリーの勢力を一掃し、神聖同盟によって擁立された国王も追放して民主的政府を樹立しようとする運動に変貌した。キリ

ストを最初の受難者と考える半神秘的傾向とルソーの影響とローマの帝国主義的拡大が混合し、当時のロマン主義の流行に乗って勢力を拡大、ナポリでは25人に1人が党員だったといわれる。ナポリで(1820)、次にピエモンテ(1821)で反オーストリーを旗印に決起したが失敗した。フランスには1818年頃から普及し、忽ち勢力を拡大し、王政復古政府の打倒を目指して活動した。組織はフリーメイソンに酷似し、20人が1組でventeをつくり、そこから代表が本部のvente suprêmeに参加した。ラ・ファイエットが一時この結社の長を務めていた。ペルフォール、ラ・ロシュール、ソミュールなどで蜂起したが失敗する(1822)。内部分裂もあり、王政復古政府の退場もあって本来の目標がなくなり、結社は他の共和主義的結社に吸収され消滅した。発生当時、山中の炭焼小屋をアジトにしたので、炭焼党の名がでたといわれる。

33) ラ・ロシュールの4名の軍曹：ポリエ、ラウル、グーバン、ボミエの4名である。1821年から既に炭焼党に加盟していた彼らは、ブルボン王朝打倒の陰謀に参加していた。彼らの所属していた第45連隊は、この秘密結社の党員たちの巢窟になっていた事は周知の事実だったので、連隊はラ・ロシュールに転属になった。陰謀の組織の間のためらいと不決断が士気の退廃を生み、計画を密告する者が出る。3月に当局の手入れとなり、芋蔓式に一味が逮捕され、26名が裁判にかけられた。首謀者と目された4名の下士官に死刑の判決が下され、9月21日、パリのグレーヴ広場で処刑された。彼ら4名は最後まで威厳を失わず収容として処刑台に登った。

34) Antoine, baron Portal (1742-1832)：フランスの医師。コレージュ・ド・フランスの教授(1769)。彼は植物園で解剖学を講義した。フランクリンやビュフォンも彼の友人である。王政復古になりルイ18世の首席侍医となった。彼は王立医学アカデミーの創立に貢献し(1820)、科学アカデミー会員になる(1769)。

35) comtesse Dash, 本名 Gabrielle-Anne de Cisternes de Courtiras, marquise de Poilow Saint-Mars (1805頃-1872)：オーヴェルニュの名家に生れた彼女は騎兵隊の将軍だったポワロー・サン・マルクと結婚するが、夫の死後、運命の変転により自活せざるを得ず、作家を志すが、名門の名を汚すから筆名を使えと強要され、愛犬の名ダッシュを採用した。上流会社で生長した彼女は、この特権階級の生活習慣、風俗、礼儀作法に精通し、また上流夫人たちの精神状態、喜怒哀楽の感情の機微を知り尽くしていた。また宗教的感情にも強い関心を抱き、作品の中で罪を犯した主人公は涙にくれて改悟し改悛する。主要作品『仮面舞踏会』*les Bals masqués*, 『金の鎖』*la Chaîne d'or*, 『アフリカの城』*les*

*Chateaux en Afrique* などがある。

36) Marie Amélie Thomase Delaunay, dit Marie Dorval (1798-1849) : 旅役者の子として生れ、幼い時から舞台に出ていた。16歳でドルヴァルと結婚したが、夫は間もなく死亡し、彼女はその後夫の姓を名乗り、一人の女として奔放な生活を送った。なかでもロマン派の詩人アルフレッド・ド・ヴィニーとの恋愛は有名で、家門の誇りから役者風情の女との結婚に断固反対する母の意志に逆らわず苦悩する男に、彼女は遂に愛想をつかして別れてしまう。この失恋の痛手からヴィニーが立ち直るのには、その悲哀と後悔を『サムソンの怒り』*La Colère de Samson* のような作品に昇華しなければならなかった。彼女の新しい恋人はヴィニーと正反対の陽気で享樂的なデュマ・ペールだったのも、あるいは当然かもしれない。彼女のこの情熱的な性格と美貌はおりから勃興しつつあったロマン派演劇の主人公にぴったりで、デュマ・ペールの『アントニー』*Antony* の主人公アデル、ユゴー作の『マリオン・ド・ロルム』*Marion de Lorme* の同名の女主人公、ヴィニー作『チャッタートン』*Chatterton* のキティ・ベルなどを演じて絶賛を博した。彼女の出演したポルト・サン・マルタン座、フランス座、ルネサンス座、オデオン座などはいずれも満員の盛況だったという。

37) Marie Taglioni (1804-1884) : 有名な振付け師である父フィリポ (1777-1871) により幼時から指導を受けていた彼女は、1822年ウィーンでデビュー、次にヨーロッパ各国を巡演した後、1832年3月12日、パリのオペラ座で父の創作バレエ『空気の精』*La Sylphide* を初演した。1827年にパリに来て以来、その非凡な優雅さとテクニックで観衆を魅了していた彼女は、この作品で舞踊家としての完璧な才能を啓示して、その名声を不動のものにした。彼女はまた軽くて半透明な衣裳を着用しそれまでのバレエのコスチュームに革命をもたらすが、これが現在のバレエ用の短いスカート「テュチュ」*tutu* の原型となった。さらに彼女は父の創作バレエ『ダニューブの娘』*La Fille de Danube* (1836)、『影』*L'Ombre* (1839) でも大成功を博し、ペテルスブルグ、ロンドン、ウィーン、ミラノを巡演し、ヨーロッパのアイドルになった。1835年に結婚、1847年に引退するが、その後もバレエ教師として優秀なバレリーナを養成している。彼女自身はロマン主義の夢の最も完全な具現者として、崇高な高貴さをもった舞踊家として敬愛された。

38) Pauline Virginie Déjazet (1797-1875) : パリの貧しい職人の家庭の13番目の末っ子として生れた。姉のテレーズがオペラ座の踊り子だったので、この妹を跡継ぎにしようとしてオペラ座のダンスのクラスに入れた。しかしこの少女は役者の道をえらび、僅か5

歳で初舞台を踏み、観客からお捻りとしてお菓子やオレンジを投げられたという。先輩女優の意地悪などもあり、パリを去って地方巡業に出て才能を磨くうち、活発で陽気な男に扮した女役者や喜劇の小間使役として有名になる。ヌーヴォーテ座で演じた『ブリエンヌのナポレオン』*Napoléon à Brienne*の幼年学校生のナポレオン少年と『その人の子』*le Fils de l'homme*のライヒシュタッド公（ナポレオンとマリア・ルイザの子）の役は大当りを取り、これが彼女の十八番となった。寡黙な2人の少年はデジャゼの冗談といたずら好きな顔つきで奇妙な異和感を発揮し、ナポレオン風の仮面舞踏会を演出し、全観客を楽しませた。

39) Pierre Jean de Béranger (1780-1857) : シャンソン作者。14歳から印刷見習い工となるが、父の創立した銀行と株仲間会社に勤務する。しかし不幸にも銀行は破産し、彼は後援者のリュシアン・ボナバルトと詩人アルノーの推挙でパリ大学事務局の発送係に就職した(1809)。正規の教育を受けていなかったが、彼は少年時代から詩を創作していた。1813年には伝統ある詩人や作詞家の「カヴォー協会」*la Société du Caveau*に入会を認められ、大いに刺激された。彼はそれまでの本格的な叙事詩や抒情詩の創作から、今生きている人々の真実の喜びや悲しみ、不平や不満を歌う平易な言葉で書かれるシャンソンの創作に自分の天分を発見する。王政復古の反動政治に対し、自由主義的愛国的シャンソンでそれを批判し、またナポレオンの栄光を賛美して王党派政府の矮小さを嘲笑し、復活した教会勢力を痛烈に攻撃した。このため筆禍事件を惹起し、1821年と28年に投獄されている。彼の単純明快なリズムのリフレンは長くパリ市民に愛誦された。代表作は『イヴェットの王』*Roi d'Yvetot*, 『老軍曹』*Le Vieux Sergent*など。作品は詩集『シャンソン』(1815-33)全5巻の他、『自伝』*Ma Biographie* (1857)などがある。

40) Marc-Antoine-Madelaine Désaugiers (1772-1827) : シャンソン作家、ヴォードヴィリスト。父マルク・アントワヌ (1752-1793) も有名な作曲家で、1774年にパリに定住したので、彼はパリ生れのパリ育ち、マザラン校に学んだが、有名な批評家ジョフロワ (1743-1814) が教師陣にいた。神学校に入ったがすぐ退学、大革命の過激化を恐れ、サン・ドミング島の農場主の妻となっている姉を頼って行ったが、すぐに黒人奴隷の叛乱に会い、抗戦するも捕虜になり、命からがら脱走し、運良くアメリカに向うイギリス船に救助されたが、戦闘の疲労から高熱を発生し、伝染病かと恐れた船員たちに、着のみ着のままの姿で、ニュー・ヨーク港に着くなり下船させられた。しかしここでも親切老婦人に拾われ看病を受けて全快する。青春の若さと天性の陽気さでクラヴサンの教師の口を紹介さ

れ、上流社会の人々の知遇を得た。帰国の旅費を稼ぐや、彼はやっとパリに帰った(1797)。帰国するや、幼時から好きだったシャンソンと当時流行のヴォードヴィルの創作に熱中し、忽ち有名作家になった。彼は自ら作詩作曲した自作を友人たちの食卓などで歌い、大いに座を賑わした。1803年に再興されたカヴォー協会の会長に就任。新入会員のペランジェを激励し、この才能ある青年を援助した。彼は王党派だったが狂信的でなかったので、ペランジェとの共作も別に厭うことはなかった。代表作は『ドニ夫妻』 *Monsieur et Madame Denis*、『午前5時のパリ情景』 *Tableau de Paris à cinq heures du matin* など。

41) théâtre du Vaudeville : ショッセ・ダントン街とカピュシーヌ大通りの交叉点に建っていたが、1927年からパラマウント映画館になっている。この辺りは昔は沼沢地で、後に整地され、1775年にモンモランシー家が建築させた邸宅が時代と共に所有者が代り、1858年頃に売却され、その跡地に1866年から68年にかけて新築されたのがヴォードヴィル劇場で、当時としてはパリで最も豪華で美しい建物だった。

この劇場の前身は、1791年にシャルトル・サン・トノレ街の旧ランブイエ邸の一角をダンス・ホールと見世物小屋に改造した芝居小屋だった。所が、1838年7月16日から17日にかけ出火し焼失したため、一座はジムナズ座や旧ヌーヴォーテ座などで公演を続けた。しかし、カトル・セプタンブル街の開通により、ヌーヴォーテ座が立ち退かなければならなくなり、新ヴォードヴィル座が上記の場所に建設の運びとなったのである。

劇場正面は、コレ、スクリーブ、デゾジュールという当代の人気劇作家の胸像を彫った3つの肖像があり、その上に、音楽や喜劇を示す4体の女人像が配置されている。柿落としは1869年4月23日、ラビッシュとトラクール共作の『お婿さん選び』 *Le Choix d'un gendre* で大当りをとった。

42) Nicolas Brazier (1783-1838) : 劇作家、シャンソン作家。父はルイ16世の内閣の帳簿係長を退職後、フォーブール・デュ・タンブル街で小さなペンションを経営していた。ブラジエは当時の習慣で、初等教育も途中で、宝石細工の工房に奉公に出された。後になって彼の文学の綴り方が不正確だとライヴェル達から嘲笑される原因が此处にあったのである。彼の生き生きとした想像力と天性の豊かな機知と特別な判断能力が、この缺点を補って、彼を当時の人気シャンソン作家デゾジュールやアルマン・グフェに比肩する有名作家に成長させた。特にグフェは彼の才能と人柄を愛し、先輩としてシャンソン創作の手解きをし指導してくれた。王政復古になると、父は宮廷での旧職に復し、彼もルイ18世所有

の書庫の司書を命じられるが、年金支給と交換でこの職は辞任している。彼は親友のデュメルサンと40篇以上の共作をしているが、正確な人情の機微の観察と尽きる事のない陽気さで度が過ぎる言葉も緩和され、いずれも観衆の喝采を博した。『ジャンソン』(1814, 1821, 1834-35, 1836,)の他に、215本の脚本を書き、そのうち150本が印刷されている。

43) パリの蒸気船：蒸気船がセーヌ川を最初に航行したのは1803年8月9日である。海軍や航海に全く無関心だったナポレオンは、フルトンの発明によるこの革命的交通機関にも興味を持たなかった。1816年3月29日にエリーズ号がチュイルリ宮付近に着岸した後、4月20日にシャルル・フィリップ号が姿を見せる。1826年に下流のサン・クルーと上流のモンローの間を結ぶ最初の定期船が登場する。1836年にはパリとルーアン間の航路が開通するが、ほぼ同時期に始まった鉄道建設により、船は汽車に負けて、1860年頃から人気は急速に落ち込み、航路の廃止が相次いだ。現在ではパリ市内遊覧船が残っているのみ。

44) ポン・ヌフ上のアンリ4世像：1604年に製作が決定され、当時ヨーロッパ随一の名工のフィレンツェのジョヴァンニ・ダ・ボローニャ(1529-1608)に依頼、彼の死後は弟子のピエトロ・タツカが引継ぎ完成させた(1613)。重量約6トンのこの像は輸送中にサルジニア島沖で舟が沈没する不幸があったが、引上げに成功、1614年8月23日、ルイ13世が礎石を置いた台座のにやっと鎮座した。この騎馬像がパリ市中に建立された最初の騎馬像となった。

1792年8月10日、チュイルリ宮を襲った暴徒は、王家ゆかりの品物を手当たり次第に破壊し、この像も12日に、橋上にあつた、ルイ13世、14世、15世の像と共に破壊され、破片はセーヌ川に投げ込まれたり、弾丸用に融かされてしまった。1818年に王政復古となり、ルイ18世は彫刻家ルモに命じて現在の像を制作させた。材料の青銅はヴァンドーム広場の円柱のナポレオン像やヴィクトワール広場のナポレオンの部下のデゼ將軍像を使用した。落成式は1818年8月25日、サン・ルイの祝日の日で、花火も盛大に打ち上げられ、6か所にビュッフエが設営されワインの泉水が12か所につくられ、盛大な饗宴が繰り上げられた。

45) la Méduse 号の遭難：フリゲート艦メデューサ号は、1816年6月17日、1815年の条約によりイギリスからフランスに返還される事になったセネガルを回収すべく、エクス島を出航した4隻の船団の1隻である。アフリカのブラン岬南方のサハラ沖40軒のアルギン島の暗礁に衝突したのが、7月2日の事だった。乗組員と兵士400名を収容する

ボートが不足し、約 150 名が長さ 10 米、幅 7 米の急造の筏に乗り漂流した。12 日間の漂流の後、2 本のマストの小帆船アルガス号に救助された時、生存者は僅か 15 名に過ぎなかった。飢餓のため、死者の肉を食べる地獄の光景が展開されたという。この衝撃的なニュースはフランスの朝野を震撼させた。ジェリコーは生存者に面談してその情景を把握し、デッサンを見せては意見を聞いて訂正をくりかえし、迫真の画面を構成した。この大作は、1819 年のサロンに出品され、スキャンダラスとして古典派から非難された。現物はルーヴル美術館に展示されている。

46) 『人間喜劇』の作者として 19 世紀最大の小説家と評価されているバルザックも、小説家として一本立ちするまではそれ相当の苦勞をしている。『クロムウエル』の不評から劇作を断念した彼は小説に転向、生活費を得るために通俗小説の合作を友人たちと始めるが、その時に幾つかの筆名を使っている。但し彼は後になってこれらの作品の作者である事を否認している。オーギュスト・ド・ヴィレルグレとローヌ卿がその時の筆名で、合作者は友人のル・ポワトヴァンである。しかしすぐにバルザックが書いてポワトヴァンが売り込みをするという役割が分担される。小説を量産した彼は共作者を除き、オラース・ド・サントーヴァンの新しい筆名で創作活動を再開する。一人ならば共作者と印税を分配しなくて済み、しかも新しい作者として契約を更新し、それまで一篇 800 フランの印税を 2,000 フランに引上げる事に成功したのである。1822 年に発表した『美しきユダヤの女』と『百歳の人』がその名で発表した最初の作品となる。その後彼は出版、印税、活字鑄造と次々に事業に手をだすがすべて失敗、莫大な借財(約 10 萬フラン)の返済と、本物の小説家になるべく真剣に創作にとり組み、初めて本名のバルザックで『最後のふくろう党员』を出版するのが 1829 年、彼が 30 歳の時であった。

47) 『恋愛論』*De l'amour* (1822.8.): 1822 年 8 月、39 歳の著者スタンダールが恋愛心理をこれまでの類書にはない独特にして鋭利かつ微細に分析解剖し、その本質を赤裸々に提示したという自負の下に、本書は公刊された。しかしスタンダールの抱負と期待に反し、1,000 部のうち 10 年間に売れたのは僅か 17 冊だったという。というのも、冷静かつ客観的に恋愛心理などを扱う精神状態に、執筆当時の作者はいなかったからである。作中に登場するレオノールこと L 夫人、彼がその当時熱愛していたマチルド・デンボウスキーに翻弄され、失望と悲嘆の渦中にあったからである。恋愛という魂の病気に人間はどうとりつかれるのか、恋愛の情熱はどのようにして相手を美化し理想化していくのか、その過程の説明でスタンダールが使用した「結晶作用」la cristallisation は、ザルツブルグの塩



坑で見た枯枝を美化している塩の結晶からヒントを得たもので、恋愛心理を解説するキーワードになっている。この語は、情熱恋愛、趣味恋愛、肉体的恋愛、虚栄恋愛という彼の恋愛分類と共に、この作品を不朽のものとしているが、全体的には恋愛に関する省察の断章であり、整然たる統一性はない。

48) 『瞑想詩集』 *Méditations poétiques* : 1820年3月13日, 24篇の作品を収録した118頁のこの薄い詩集が出版されるや、前記の『恋愛論』とは正反対で、絶大の人氣を博し、4月10日には再版となり、その後も版を重ね、1822年には第8版、1849年までに41版が出版された。この処女詩集1冊が、それまで全く無名のラマルチヌを当代随一の大詩人にしてしまったのである。純粹で清純な青春の恋愛感情、愛する人を失った痛切な哀悼の心の孤独が、美しい自然を背景に抒情的に歌われている作品、特に4大傑作といわれている『孤独』 *L'isolement*, 『谷間』 *Le Vallon*, 『湖』 *Le Lac*, 『秋』 *L'Automne* は、人生の儚さと共に、自然に対する畏敬の念と信仰心を啓示し、当時の社会に清新な感動を与えた。愛の詩の復活を歌ったこの詩集は、ロマン主義詩歌の域を越え、不朽の名作となっている。

49) 『アドルフ』 *Adolphe* : 作者コンスタンの自伝的恋愛小説の傑作である本書は、1816年にロンドンとパリで同時出版された。最早愛せなくなった男と愛され続けたい女性との恐ろしい関係を冷酷な程の精緻かつ正確な文章で描いている。主人公のアドルフは貴族の情人である年上の女性エレノールと結ばれるが、彼女の愛情が重荷になり別れようとする。しかし彼女から死ぬと言われると、別れる決心がぐらつく、というように、女性の恋愛心理よりも、女性に悩ませられる男性の優柔不断の迷いからくる心理がよりよく描かれているといえよう。主人公エレノールのモデルは、コンスタンが交渉もったアンナ・リンゼイ、シャルロット・アルダンベルグ、ジュリエット・タルマたちの面影が認められるが、やはり圧倒的に強烈な印象は、「永遠の嵐」のような関係を持っていたスタール夫人といえよう。古典的といっぴよい簡潔正確な文体と共にこの作品は近代心理小説の母胎となっている。

50) Jean François Champollion (1790-1832) : フランスのエジプト学者。グルノーブルで中筆教育を終え、パリに上京し (1807)、東洋語学校とコレージュ・ド・フランスで学ぶ。彼ははやくからエジプト古代語に関心を持ち、コプト語がその後代の言語であると信じた。彼はトーマス・ヤング (1773-1829) が分析を試みたが解読できなかつた象形文字の刻んであるロゼッタ・ストーンの復写を所有していた。彼に解読のヒントを与えてく

れたのが、1821年にPhilaeで発見されたオベリスクのテキストだった。彼は古代エジプト僧用の印と象形文字及び古代エジプトの民用文字の印の間にある照応を発見、象形文字解読の手掛りをつかんだ。古文書学者である兄ジャンポリオン・フィジャック（1778-1867）の熱烈な支援の下で、彼は研究の成果を一連の論文に纏めて発表し、特に『象形文字体系概説』*Précis du système hiéroglyphique*で、画像と音声的要素が部分的に結合している記号システムを発見、象形文字の知識と語彙と文法の確定に不可欠なその後の解読を可能にしたのである。1826年ルーヴル美術館に特設されたエジプト部門の主任に任命され、1828年から30年にかけてエジプト探査を行い、帰国してから『エジプトとヌビの記念建造物』*Monuments de l'Égypte et de la Nubie*を発表する。1830年に碑文アカデミー会員、翌31年にはコレージュ・ド・フランスに開設されたエジプト学講座の教授に就任した。遺作となった『エジプト語文法』*Grammaire égyptienne*と『エジプト語辞典』*Dictionnaire égyptien*は兄の努力で、1836年から41年にかけて出版され、エジプト研究の重要な基礎文献となった。

補注1) *La Norma* : フランス・ロマン主義の先駆者の一人アレクサンドル・スーメ（1788-1845）の劇作『ノルマ』*Norma*（初演は1831年4月16日、パリのオデオン座）を、イタリアの音楽家 Vincenzo Bellini（1801-1835）が2幕のオペラにした作品。『夢遊病の女』*La Sonnambula*（1831）で大評判を得た新進の歌劇作者であったベルリーニに、当時人気低迷中のミラノのスカラ座が起死回生の策として、彼に新作を依頼し、その成功で財政難を克服し経営の再建を企図した。ベルリーニはパリで上演されたばかりの『ノルマ』に注目、オペラ化の可能性を確信、ベルモンテとロマーニによる台本を受領してから僅か3か月で完成した、と伝えられている。初演は1831年12月26日、ミラノのスカラ座で、主役のノルマは当代随一のソプラノ歌手 Guiditta Pasta（1707-1865）である。ソプラノ歌手として名声を確立していたバスタにとり、これがスカラ座のデビューであり、他の出演者も当時の最高の歌手たちであったため、歌劇は大成功をおさめた。パリへの凱旋興行は、1835年12月8日、イタリア産で行われ、これもまた熱狂的な支持を得た。

作品の時代と場所は、紀元前50年頃、ローマ帝国が支配しているガリア地方、登場人物はローマ帝国のガリア地方総督ポリオーネ、ドルイド僧の長オロヴェューズ、その娘で巫女の長のノルマ、若い巫女アダルジーザらである。ポリオーネを愛し密かに2人の子を産んでいたノルマは、今や彼がアダルジーザに心を移し、彼女と共にローマに帰国しようとしているのを知る。巫女には禁じられている恋にアダルジーザは、その悩みをノルマに告

白, 2人の女性の2重唱はこの歌劇の傑作である。ノルマはアダルジーザに子供の教育を托し, ポリオーネの不倫の相手は自分であると人々の前で告白し, 恋人と共に火刑台に登っていく... ガリアの地という地方色とドルイド教の支配する時代の独創的雰囲気, キリスト教以前の人々の情熱的信念と愛情と行動が, 観客を魅了した。

補注2) Giuditta Pasta (1797-1865): イタリア北部ロンバルディア地方コモの出身で同地で歿した。ミラノの音楽学校で学び, 1815年卒業後, アマチュアの劇場でデビュー, 1816年パリ, 翌17年ロンドンでデビューしたが成功しなかった。イタリアに帰国し勉学に務め, 1819年ヴェネチアでの出演で成功し, 1821年にパリを再訪, 今回は大成功をおさめた。イタリア座でのシェイクスピア原作の歌劇の主人公たちを演じ, 特にジュリエットは絶賛を博した。彼女の音域の広さ, ドラマチックな表現力は当代一流のソプラノ歌手としての名声を不動のものとした。ロンドン, パリ, ミラノ, ナポリなど各地の公演は, 全ヨーロッパの人気を確立した。当り役はドニゼッティ作『アンナ・ボレナ』*Anna Bolena*, ベルリーニ作『夢遊病の女』『ラ・ノルマ』である。ソプラノ歌手の宿命ともいえる声帯の酷使により, 1837年には引退せざるを得なかった。1865年, 生れ故郷のコモ地方のベルヴィオで死去。

(続　く)

(追　記)

- (1) 参考図書などは, [I] の巻末に掲載してありますので, そちらを御参照下さい。
- (2) 前稿 [XX] に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。  
P.4. 下から6行目 箆笥を  
P.19. 下から13行目 美術館にを

— 2006.12.23 —